



追想 倉橋惣三先生と坂元彦太郎先生

「坂元君、幼稚園は援助だよ」

林 健造

(聞き手・構成 浜口順子)



林健造先生は画家であり、幼児造形教育研究者でもある(本誌第八十九巻と第一〇七巻の表紙の絵は、林先生の作)。一九一七(大正六)年生まれで、今年九十三歳。

一九五四(昭和二十九)年、お茶の水女子大学(以下、お茶大)教授の坂元彦太郎(一九〇四―九五)に招かれ、金沢大学からお茶大附属小学校に図工科教員として赴任、同大学でも教鞭をとられた。一九七四(昭和四十九)年、十文字学園女子短期大学(以下、十文字短大)に移り、同附属幼稚園園長も務められた。

坂元は文部省初等教育課長として、連合国軍総司令部

(以下、GHQ) 民間情報教育局と討議しつつ、一九四七(昭和二十二)年に公布された学校教育法に幼稚園を「学校」として規定する条文を起草した人物であり、『倉橋惣三・その人と思想』(フレーベル館)の著者でもある。林先生

は倉橋惣三がお茶大を辞した直後に同附属小に着任されたので、倉橋と面識はないが、坂元を通して倉橋の話をよく聞いたという。林先生のかかわられていた創造美術運動に、倉橋惣三の思想の影響が大きいとも語られる。

本稿は、林先生書き下ろしの原稿とインタビューを基に浜口が構成したものである。

幼児教育は援助だ

倉橋先生と坂元先生の関係で深く記憶しているのは、戦後の学校教育法制定の過程のことです。

アメリカの占領軍の下で日本が教育改造を進めていた時、日本代表は英語の達者な坂元先生でした。

第四十二回の日本保育学会大会（於、十文字短大一九八九年）において、坂元先生はその辺のことを記念講演でお話しされています。

GHQ民間情報教育局との会議の前日、坂元先生は自分の原案をもって兄貴分の倉橋先生にご相談にうかがったそうなのです。私はその夜、「林君、すぐ校長室へ！」と呼ばれたので、急いで駆けつけました（坂元先生は当時、附属小学校の校長でした）。「いよいよ明日だ、何日も新日本の幼児教育という題でいろいろ考え、案を練ったが、今日午後、倉橋先生のお宅にお訪ねして、このプランを御覧いただき、考えを申し上げた。教育の大原則は人の子

を人が立派な人に育て上げること、それにはフレール先生のおっしゃるように、まず、子どもをとりまく環境を整えることが第一と考えることを伝えたい」というお話でした。その時、倉橋先生は「坂元君、幼稚園は援助だよ。援助。教育を先頭にもってこないこと……」と言われたそうなのです。

倉橋の造形教育論

大正十年ごろの話、倉橋先生がなじみの呉服屋さんの長さんと会います。

倉橋「おや、今日はお出かけ？」

呉服屋「はい山城屋さんの坊ちゃんに絵のお手本を届けに」

倉橋「絵って、どんなお手本」

呉服屋「はい七福神です、いい絵ですよ」

倉橋「オイオイそんなお手本、坊ちゃんにあげるのはだめだよ」

呉服屋「とんでもない、子どもは手本がなければ絵

は描けませんよ!」

倉橋「子どもは手本などなくても描くものはあるよ。大人が手本などやるからダメになるのだよ!」

呉服屋「エ、そんな」

倉橋先生は臨画（お手本のとおりを描く）を極力否定しておられたのです。それなのに、世の中の幼稚園では、「ぬり絵」がかなり盛んになっていくという矛盾がありました。

坂元先生の「臨機保育」の話

坂元先生の保育論では、こんな話を思い出します。

ある朝、「カメが赤ちゃんを産んだ、どうしよう」という連絡を受けて、ある幼稚園の園長先生が急いで保育室に駆けつけました。そうしたら驚いたことに、そのクラスでは先生と子どもが一緒に折り紙をしています。角と角が合わないでいると、「まっすぐに折るのよ」としかられたりしています。それより、カメの赤ちゃんとお出合って「あ、かわいいな!

私も赤ちゃん育てたいなあ!」と、なぜ心を響かせないのでしょう。四歳児の心や感性に迫るものが、タライの中の親子の生命（いのち）にたくさんたくさんあることでしょう。

坂元先生にこの話をしたら、「臨機応変という言葉があるだろう、折り紙とカメの赤ちゃんを比較して、今日の活動はどちらが子どもの保育にとってプラスか考えられる保育者でありたいね」と。「子どもってその瞬間瞬間が大事なんだ、その時をはずせばもう次の楽しい遊びを自分で見つけて遊んでいるものだ……」とも言っておられました。

私たちはしみじみ臨機保育の大事さを知り、実習生の間でもこの言葉に救われる者がたくさんいました。それから「坂元臨機保育」という言葉は、保育界でよく使われました。

自己伝達することが大事

一九八九（平成元）年に改訂された幼稚園教育要

領で、倉橋先生の考えが大きく取り入れられたとよく言われます。実際はどうなのでしょう。私は、現代の表現教育の問題を考えてみたいと思います。

五領域となつて、その名前の一つが「表現」になりました。それ以前の教育要領で、保育内容は「音楽リズム」と「絵画製作」が分かれていたので、いまより一つ多い六領域でした。私は「造形」という言葉がいいと考えていたのですが、今度は「表現」です。幼児には親しめない言葉でしょうね。四歳の子が、「ぼく、幼稚園で一番好きなお絵描きじゃないよ、表現だなあ」と言うのは想像できません。表現の「表」は「あらわす」。人にわかるように説明するというのはこちら。「現」は「あらわれる」だから、あらわれてびつくり、驚く。この二つの意味が入っています。

「表出」と「表現」は違います。赤ちゃんが泣くのは表出。自分で終わっている。ピアノに上った幼児が足をばたばたさせるようなことまで表現と言つて

いいのか。それで教育でしょうか。

表現において、「伝達」ということが大事です。つまり、伝えるということ。役者がさめざめと泣いたり、お能で顔を隠したりすると「ああ泣いているんだな」と伝わる、これは表現。こういう、人にわかるように伝えるのは「他伝達」です。

それから、表現には、自分自身に伝える「自己伝達」というのがあるのです。これを忘れている先生が多いのではないしょうか。

子どもが絵を描き終えた時、「先生！描いたあ、見て！」と見せに來ます。先生は「あら描いたの。ほう、いいじゃない？描いた人はあのお机に出してお庭で遊んできてもいいよ」。こういう評価だけしていたのでは、子どもの心や感性の伝達ができません。どこがいいのか指ぐらい当てて「この花のところ、先生は好きだなあ！赤い花がとってもきれい！」と言えば、あ、先生ちゃんと見てくださったのだと、子どもの喜びも倍になるでしょう。

子どもが先生に絵を見せる前に、何かブツブツ言っています。「ママのおめめ、小さかったなあ、ほんととほ大きいよ。怒るとこんなに大きんだからあ」。ブツブツまだ何か自分の絵を指さしてつぶやいています。これは鑑賞（自作の評価・反省になる）行為で大事なことです。先生はそのツブヤキに参加して、「ママの目、これ、とってもかわいいわよ！ この目、好きだな」と手を触れたり、二重丸でもつけてやれば、子どもの絵を描く喜びの心が育つでしょう。机の上に出してさあ遊んでこい、ああいいね、では何も育ちません。

私が園長をしていた十文字短大附属幼稚園で、父の日の参観日にパパの絵を描くことになりました。A君はパパの顔を全部青色で描きました。「あらあこれいいの？ 青いお顔で」とA君に聞いたら、A君は飛んできて「あ、これでいいよ！ 朝ごはんの時にママが『あらパパ、お顔青いわよ、昨夜お仕事遅くまでしてたから、会社で気をつけてね』って。

ボクも見たけどホントに青かったんだからあ！」と真剣な顔で話してくれました。こういうことも自己伝達をきく大事な点だと思います。

靴屋さんで親は安いほうの運動靴を買おうとしているのに、子どもが「こっちのほうがいいなあ」ということ、これも自己伝達としてとてもうれしい。その表現をきくこと（買ってやるとは限りません）も豊かな関係を育てます。

展覧会のあり方

園の展覧会の日、「よしおの絵、どこのの？」と親が聞きます。「ええと、どこだっけ」……。先生が「よしおちゃんのあれでしょ」と言うと、よしお君は「あれー？」。どうも覚えていない様子。先生も親もがっかり。これでいいのでしょうか。

自分の描いた絵をいったん遠くに離して見る。これは大事な体験です。幼児は、夢中で絵を描く時、紙からせいでい10 cmか20 cmのところまでしか顔を離

していません。だから、その絵をそのまま先生に出してしまうと、壁に飾られた時、それは別の絵になってしまっていて、自分の絵かどうかわからないということが起こるのです。

自己伝達は、自分の表現を鑑賞することを促すことで実現されます。それも子どもから楽しく自然にそうすることが大切です。「遠くに離して見るのですよ」と言うのではダメです。たとえば、子どもが絵を描いたら、床に描いてある円の中に入る。そこから少し離れたところにはイーゼルが置いてある。そうすれば子どもは遊びのように、イーゼルの自分の絵を置いて改めて見ることを楽しむでしょう。

私は長く子どもの絵について考えてきましたが、最近つくづく思うのです。幼児の自己伝達の部分をきく先生が少なくなっているのではないかと。展示する絵を、展示の仕方を、子どもに選ばせているのでしょうか。私は赤い紙の上に貼りたいな、僕は青い紙の上がいいな。これが「よしおの絵」と、自分

のやったことがちゃんとわかる、子どもが主体になっている展示会をしてほしいと思います。

「パパの顔が青いのは変だねえ」とか「この絵は何を描いたのかな。ライオンかあ」と決めてしまうのは、他伝達の部分ばかりを見ている先生の姿です。しかも他伝達の答えが一つだと考えてしまうことが大きな問題です。

幼児は三歳から四歳に移るころ「自分でえ！」という言葉を言います。親が手を出すと、最後の言葉を高め「……でえ」と叫ぶ。パンツをはく時、靴をはく時、粘土で遊ぶ時、胸のボタンをかける時。してもらっていた時代を卒業し、自分の考えたやり方でやるからいいよと成長した証しです。私も死ぬまで新しく生きたいなあと思います。「自分でえ」という気持ちです。

(画家・十文字学園女子短期大学名誉教授)

構成・浜口順子 (お茶の水女子大学大学院准教授)